

## 2. 青刈り用ひえの栽培法について

(品種の早晚と刈取り時期、作期、有機物施用について)

### 1. 背景と特徴

ひえは旺盛な生育量と栽培管理の容易なること、家畜の嗜好性の良好なる点から青刈り飼料作物として通しており、先に自然飼料強化を目的にその栽培を進めてきた。今後さらに①早、中、晩別品種の刈取り時期、②作期(遅播き)と収量、③有機物の施用効果について検討した結果、本県在来種(早生)は早期刈取りで晩生種より多収性であり、また、各品種とも7月下旬(遅播き)播種でも青刈り用として十分利用できる。さらに、有機物の多投により多収となることがわかったので参考に供する。

### 2. 技術内容

#### (1) 早中晩別品種の刈取り時期

① 本県で現在栽培されている早生および中生種、5月下旬播種で8月上旬までの刈取りでは晩生種よりも多収である。(播種量 $0.1\text{ Kg}/\text{a} \sim 0.2\text{ Kg}/\text{a}$ )

有稟品種 早生種=ヤリコ、乙、石鳴、浄法寺在来、宮古在来

中生種=朝鮮、二子橋、遠野在来Ⅱ、遠野在来Ⅲ

② それ以後(8月下旬)の刈取りでは晩生種が多収で、また全面播栽培(飛騨在来)では播種量 $0.6\text{ Kg}/\text{a}$ が適する。

#### (2) 作期(遅播き)と収量

① 現在栽培されている早生および中生種を7月下旬播種し、9月下旬刈取りした場合には条播で $0.5\text{ t}/\text{a} \sim 0.55\text{ t}/\text{a}$ 、全面播きで $0.65\text{ t}/\text{a}$ の収量となる。

② また、晩生種(飛騨在来)の全面播栽培で播種量 $0.6\text{ Kg}/\text{a}$ で生草量 $0.7\text{ t}/\text{a}$ となるが、乾物率が低いので、前記刈取り時期より遅らせた方が有利である。

③ この作型は冬作物(麦類・エンネクなど)あるいは生育期間が短い春播き作物(レタス、ライ麦、エンバク、青刈り作物など)の跡から冬作物までの期間の土地利用に適用される。

#### 有機物の施用効果

県北地帯(軽米)でも、晩生種(飛騨在来)の7月下旬播種、9月下旬刈取り(栽培期間2ヶ月、全面播)で5トン以上の収量となり、さらに有機物の施用により、堆肥5t、オガ屑牛糞5t、乾燥鶏糞0.5t程度の施用で $7\text{ t}/10\text{ a}$ 以上の多収が期待できる。

### 3. 普及上の留意事項

(1) 早生、中生種を5月下旬播種し青刈りする場合には、8月上、中旬(穂孕期~出穂期)が多収となり、これよりおくれた場合に播種量 $0.2\text{ Kg}/\text{a}$ では倒伏のおそれがあるため適期刈りとする。また、晩生種は全面播として播種量 $0.6\text{ Kg}/\text{a}$ で8月下旬~9月上旬が刈取り適期となる。

- (2) おそ播きの7月下旬播種ではとくに出芽時の乾燥に注意すること。
- (3) 麦刈り跡等を利用して容易に青刈り飼料作物が得られるが必ず施肥 $Kg/a$  (  $N$  8、 $10$ 、 $P_2O_5$  2.0、 $K_2O$  2.0 火山灰土 ) は行うこと。
- (4) 有機物の多設 ( 5 t 以上 ) の場合はプラウで鋤込むこと。
- (5) 早、中生種を採種する場合は、播種量  $a$  当たり 25 ~ 50 g とし、窒素の施肥量は成分で 0.6 ~ 0.8 (  $Kg/a$  ) 以内とする。

4. 残された問題点

- (1) サイレージの調製法
- (2) 生育初期の雑草防除
- (3) 粗放栽培法の確立

5. 試験成績の概要

- (1) 早中晩別品種の刈取り時期 ( 549 ~ 50 )

① 試験方法

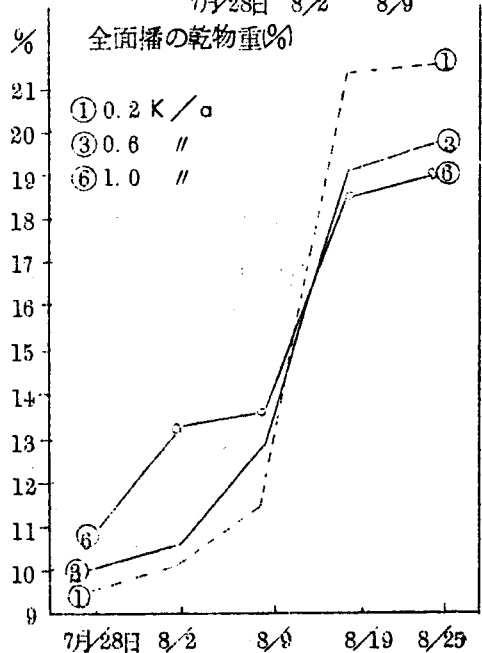
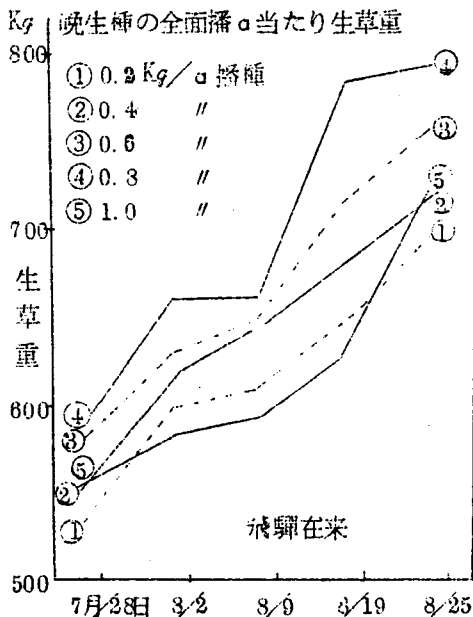
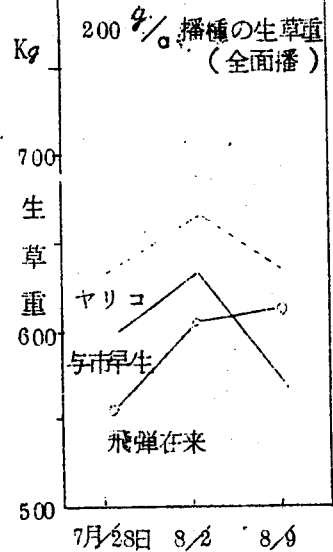
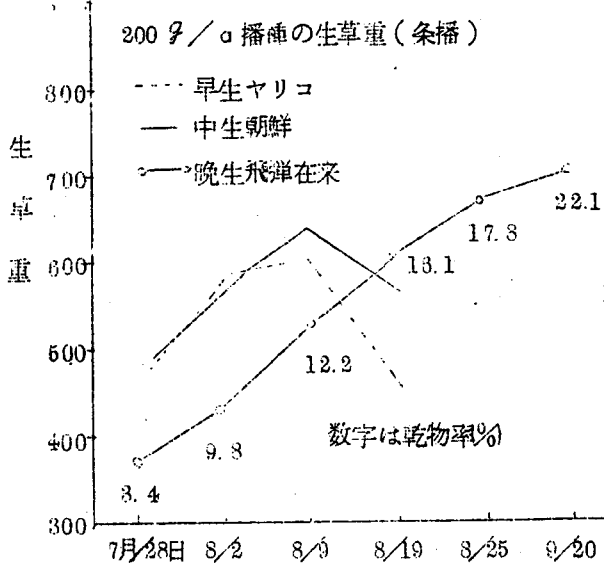
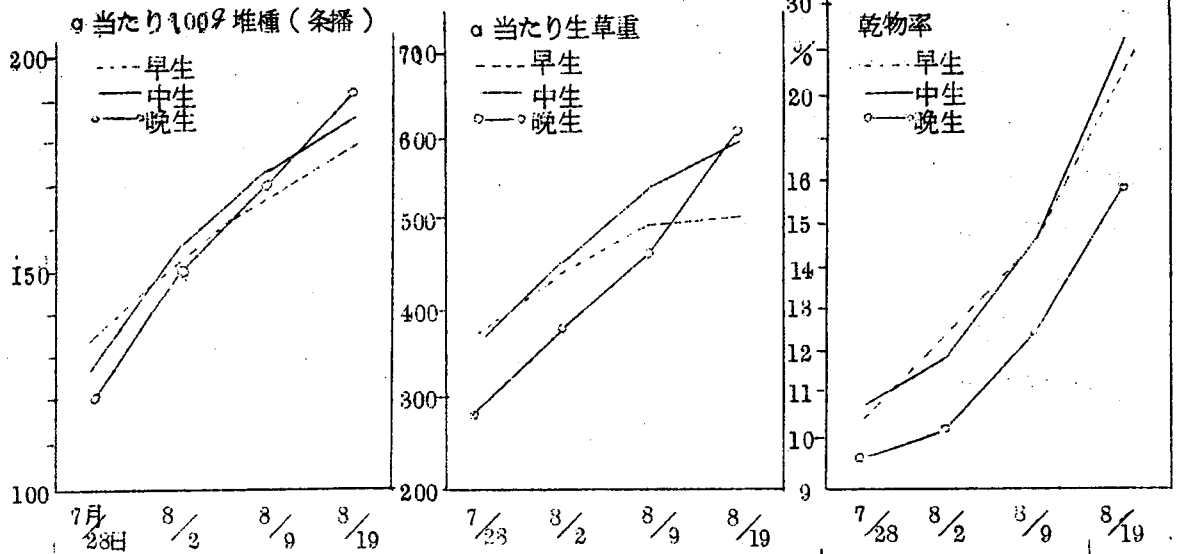
ア 供試品種

本県在来早生種、与市早生他 9 品種、本県在来中生種、朝鮮他 6 品種、暖地系晩生種、飛騨在来他 9 品種

イ 供試条件

項目	栽植様式	播種量 ( $Kg/a$ )					
		0.1	0.2	0.4	0.6	0.8	1.0
早生	条播	○	○	備考： 施肥量 ( $Kg/a$ ) $N$ : 10 + 0.6 ( 硫安 ) $P_2O_5$ : 2.0 ( 過石 1.0 + 溶燐 1.0 ) $K_2O$ : 2.0 ( 塩加 ) 播種期 5月23日			
	全面播	○	○				
中生	条播	○	○				
	全面播	○	—				
晩生	条播	○	○				
	全面播	○	○				
刈取り時期	早中種	7/28	8/2	8/9	8/19		
	晩生種	"	"	"	"	8/25	9/20

② 主用成果の具体的データ



(2) 作期(遅播)に関する試験(S49~50)

① 試験方法

ア) 供試品種

本県在来早生種与市早生他10品種

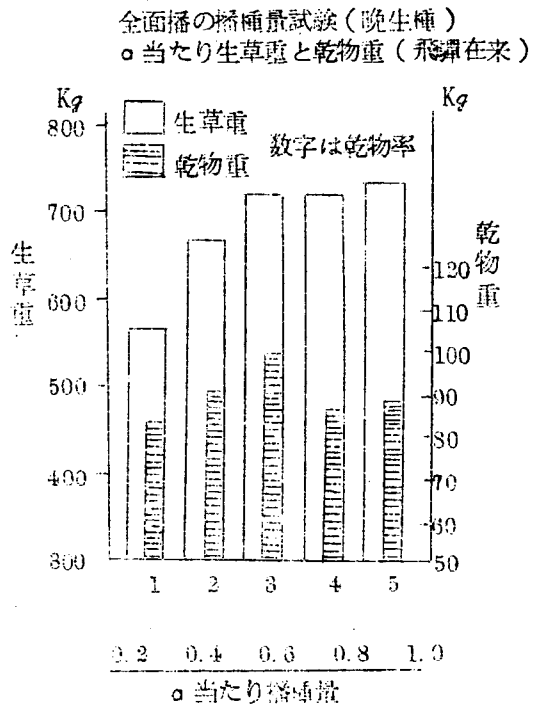
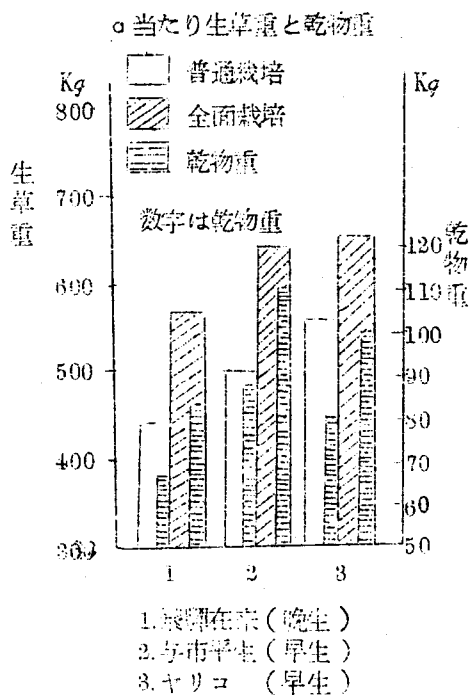
イ) 供試条件

項目 熟期別	栽植様式	播種量 (Kg/a)				
		0.2	0.4	0.6	0.8	1.0
早生	条播	○	備考: 施肥量 (Kg/a) N: 1.0 (硫酸) P: 2.0 (溶磷1.0 + 過石1.0) K: 2.0 (塩加)			
	全面播	○				
晩生	条播	○				
	全面播	○				

ウ) 播種期 7月24日

エ) 刈取時期 9月18日

② 主要成果の具体的データ



(3) 昭和50年度青刈りヒエ試験成績概要

試験課題名：畑作物に対する有機物の施用効果試験（昭和49冬作～）

① 試験設計の概要

ア 供試作物：昭和49—ニンニク（マルチ栽培）—昭和50—青刈ヒエ—小麦

イ 供試条件：有機物無施用、鶏糞0.3、0.6 t / 10 a、オガ屑牛糞3 t、6 t / 10 a

堆厩肥3 t、6 t / 10 a

施用法…全面散布し、プラオで耕起後、施肥し、ロータリーで碎土整地。

供試品種…ヒエ、飛騨在来

播種法…ロータリーで整地後、全面散播し、レーキで均拌覆土する。

播種量…1.5 Kg / 10 a

播種期…7月25日 収穫期 9月21日

施肥量 (Kg/10 a) …N20 - P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>20 - K<sub>2</sub>O-20（硫安過石、塩加）

ウ 試験成績：

区名	草丈 (cm)	生草重 (Kg/10 a)	同左比 (%)	NO <sub>3</sub> -N (mg/100 g)	
				8/19	9/10
1. 無施用	145.0	5,250	100.0	11.6	10.1
2. 鶏糞 0.3 t	151.0	5,020	95.6	14.9	9.8
3. " 0.6 t	162.4	6,275	119.5	15.0	12.0
4. オガ屑牛糞 3 t	159.8	5,245	99.9	19.1	15.0
5. " 6 t	163.9	7,175	136.7	23.0	17.2
6. 堆厩肥 3 t	155.9	5,150	98.1	18.9	12.0
7. " 6 t	162.2	7,400	141.0	26.8	12.9